川崎市長賞受賞作品

「大好きな本に出会って」

久末小学校　５年　田添　愛理

作家になりたい！そう思ったのは、小学四年生の時です。学校の図書室で、どの本を借りようかなぁといろいろな本を見て回っていた時、ある厚い本を見つけました。最初は、こんなに厚い本読めるかなぁと思ったけれど、ちょっとページをめくってみると、「魔法」という言葉が目にとびこんできました。そう。この本は、『ハリー・ポッターと賢者の石』です。わたしがこの本で一番好きな場面は、にぎやかな商店街「ダイアゴン横丁」で、ハリーが杖を買うところです。この場面は、杖屋の「杖は魔法使いを選ぶ」という言葉が、謎めいていて印象に残ります。

最初に読んだ時は、「マグル」や「姿くらまし」などという、なんだかよく分からない言葉が出てきて、ちょっと話についていけない時もありました。でも本についている『ふくろう通信』に、辞典のようなものがあったので、なんのことかよく分かって読めました。

読み終わった時、わたしは主人公のハリー・ポッターの気持ちになって読んでいることに気がつきました。例えば、親友のロン・ウィーズリーとケンカをした時は、少しむっとしたり、クリスマスプレゼントをもらった時にはうれしくなったり・・・。そして、そんな気持ちになって読めていたわけは、文章が共感を呼んでいるからだということに気がつきました。「～だったのだろうか？」と書かれていると、わたしもなんでだろうと一緒に考えます。「～なのだから。」と書かれていると、そうなんだとうなずいてしまいます。そうして主人公と一緒に迷ったり喜んだりしながら冒険へ行くのです。共感したから、もっと深く物語に入れたのだとわたしは思います。

わたしの夢は、今までに何度も何度も変わってきました。ようち園の時は、海ぞくや魔女や忍者、小学校低学年の時は小学校の先生・・・。好きな本だっていろいろと変わっています。『長くつ下のピッピ』（作・アストリッド・リンドグレーン）や『精霊の守り人』（作・上橋菜穂子）、『フェアリー・レルム』（作・エミリー・ロッダ）などです。日本らしい物語や、外国らしい物語など、物語の時代や場所はいろいろです。しかし、どの本も主人公の気持ちがよく分かり、大好きになりました。主人公と心を一つにしていろいろな冒険をしていくのが、いつ読んでも楽しくて面白いです。

そして今、わたしの夢は、このような本を書いた人のような作家になることです。読んだ人がワクワクするような伝説や魔法の本が書きたいです。

そこでわたしは家の周りに取材しに行くことにしました。『ハリー・ポッター』の作者、イギリス人のJKローリングさんは、森や魔法使い、寄宿舎など、イギリスに伝わる話を取材して、たっぷりえがいたのだそうです。わたしもそうしてみようと思ったのです。

初めに、近所の橘樹神社に行きました。すると、今から千年以上前に神様が海をわたろうとしていた時、海が荒れ、困っていたところ、海をしずめるために弟橘媛が人柱になり、神様は海をわたることができたという伝説が石板に書いてありました。これは物語に使えるかもしれないとワクワクしながら、次に子母口貝塚に行きました。それは、じょう文時代の人がまだ家の周りが海だったころに、海から貝をとって食べていて、その食べた後の貝がらを放っておいたら貝塚ができたというものです。今もまだ海が広がっていたら、もっと大きな貝塚ができていたのかなと面白いと思いました。次に、子母口富士見台古ふんといわれる古ふんに行きました。わたしは小高い山のような古ふんのてっぺんに立って、両手をこしにあててみました。すると、急に王様になったような気分になって、ゆかいな気持ちになりました。

わたしは、伝説の場所が家から歩いてすぐにいろいろ見つかって、こんなに歴史に囲まれてくらしているんだなぁとびっくりしました。もしかしたら、わたしの住む川崎は王様がおさめる伝説の都市だったのかもしれません。できることなら、そのころ住んでいた同い年の子に会って話をしてみたいです。

わたしは、龍や神様や魔法などの不思議な存在がたくさんでてくる物語を書きたいです。主人公は不思議な力を持つ子どもにしようと決めています。それは、長い杖を使って魔法で薬を作ったりいたずらをしたりする、男の子です。そして、男の子が大魔法使いになるために仲間と魔法の修業をする物語を書きたいです。

読者が主人公と一緒に冒険の旅に行けるかどうかは、文章が共感を呼ぶかどうかの表現次第です。わたしは、読者が冒険の旅に行けるような本を書く作家になって、世界中の読者を見たこともない物語の世界へつれて行きたいと思います。